

西淀川記憶あつめ隊

Vol.10

今回は高田研理事からの投稿です。鹿児島で出会った西淀川人についてのお話です

こんなところで西淀川人
鹿児島県甕島

2014年5月10日
訪問



◆段々畑で出会った西淀川人

甕島は鹿児島から鹿児島本線を熊本へ向い川内駅せんぐちで下車。河口にある港から高速船で東シナ海を40分(距離約26km)。主産業は漁業と観光。漁業は通年のキビナゴの刺し網やブリなどの定置網。カンパチやマグロの養殖場もある。私が訪れたのは上甕島かみごししま・里地区(人口1305

人/2013)。町は2つの島を繋ぐ陸繋砂洲りくけいさす(トシボロ)上にある珍しい集落。

農業は耕地に適した平地が少なく、山の斜面に細かい段々畑を一面に拓き、麦や甘藷を栽培してきた。近年は焼酎の原料となっている。

かつての段々畑は放置されて常緑広葉樹に覆われている。段々畑の面影を辿って斜面を登ると、小さな2枚ばかりの畑の手入れをするTさん(1938年生、76才男性)がいた。Tさんは畑で、生食するラッキョを栽培していた。上段の畑は30年も放置されて樹木が繁り、畑を覆う様になってきている。雑談していると、Tさんはなん

と西淀川に住んでいたという。

◆漁業↓炭鉱↓西淀川

Tさんは甕島生まれの3男。小学生の時に父親と死別し、残された3人兄弟と母親は叔父さんの元に身を寄せた。中学校を卒業(1953年)し、16才の時、兵庫県竹野で水産会社の漁船に乗り、巻き網漁をした。しかし「ナグレ(放蕩し)」て辞めたと本人は語る。その後北海道に渡り、歌志内にあった三井の炭坑で働いた。仕事は大成建設が建設して

いた立坑の(ウインチによる巻き上げ部分)工事に従事した。しかし炭坑では当時ガス爆発事故(1958年三井砂川炭坑爆発事故)が起こっており、危険な職場であったので約7ヶ月でやめた。

その後、兵庫県尼崎市に移って西淀川の玉造鋼業株式会社で圧延の仕事に就職する。スクラップとなった船の鉄板をシャーリング(せん断加工)し、炉に入れてローラーで6回延ばし、13ミリまで薄くする仕事。今と違って全て手作業であった。田中角栄が首相だった34



36才頃は工場内に在庫が残らない程景気が良かった。尼崎在住時に結婚して子どもが出来、運良く府宮姫島住宅(1962年建設)に入居して、西淀川の住民となった。入居した頃は、大気汚染も、住宅の横を流れる大野

川の悪臭もひどかった。その大野川が埋め立てられて1979年に緑陰道路として生まれかわった所まで見届け、母親の介護をするため41才で家族ともども甕島に帰った。母親は島に帰って1年半後に亡くなった。それから35年、西淀川との繋がりがほとんどなくなったという。帰島後は水産会社に入り、無人島であった宇治群島(甕島より南方約53km)の飯場で寝泊まりしながら定置網漁をしていた。東京で働いていた長男は病気で亡くなり、次男は生まれ故郷の尼崎にいる。

◆西淀川を支えた人たち

高度経済成長の時代、西淀川の鉄鋼業は元気であった。その労働を支えていたのがTさんのように地方からの若者達であった。バブル景気が終わる80年代以後、故郷にUターンした人々も多い。

西淀川の歴史を語るとき、決して忘れてはならない人々であるとあらためて思った。

高田 研

(都留文科大学文学部社会学科教授)